

E-3

カムサ語における名詞抱合の概要*

蝦名 大助 (神戸山手大学)

要旨

カムサ語では動詞に名詞が抱合されることがある。抱合される名詞は、動詞語幹頭母音の直後に挿入される。抱合形は語根形であることが多いが、語根形よりも短いこともある。後者の場合、語根形に似ていることもあれば、似ていないこともある。抱合される名詞は、主語、目的語、場所格補語として機能する。ただし対応する文がないこともある。抱合される名詞は身体部位または場所を表わすものが多い。身体部位は身体全体に対する部分、すなわち場所を表わしている、と解釈すると、カムサ語の名詞抱合は場所的な意味を表わすことが多いといえる。

1. はじめに

カムサ語 (Kamsá) はコロンビア共和国プトゥマヨ (Putumayo) 県シブンドイ (Sibundoy) で話される系統不明の言語で、話者人口は約 4,000 人とされている (Jamioy Muchavisoy (1999: 252))。

カムサ語では、動詞に名詞が抱合 (incorporation) されることがある。先行研究では Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 82) に名詞抱合の記述が見られる。そこでは「名詞語根、あるいはその短縮形が動詞語根に接頭辞として付くことがあり、動詞の直接補語か場所格補語として機能する」とされ、いくつか例が挙げられている。本発表では、抱合される名詞の形態的・統語的・意味的な特徴について、発表者の調査により新たに分かったことを述べる。

2. 動詞の構造と抱合

カムサ語の形態論は膠着的で、動詞においては接頭辞が優勢である。動詞語幹に数を表わす接尾辞が付くほかは、原則としてすべて接頭辞が付く。

アスペクト 1-極性-人称-未来-証拠性-アスペクト 2-「再び」-過去-再帰-語幹頭母音-抱合-語幹-数

図 1 : カムサ語の動詞構造 (発表者の試案)

抱合される名詞は動詞語幹頭母音の直後に挿入される。

- (1) ø-ʂo-n-x-a-betʂə-tsetʂén
 C-3>1-DIR-UM-SHV-頭-痛い
 「私は頭が痛かった。」 (lit. 「私を頭痛する。」)

*本論文のもととなる調査は、2015 年～2018 年、それぞれ 8 月～9 月にかけてシブンドイで行なった。このうち 2017 年と 2018 年の調査は、文部科学省科学研究費助成事業 (挑戦的研究 (萌芽)) 「カムサ語の動詞構造の研究」 (課題番号: 17K18498) によって行なった。調査協力者は San Felix 地区 (vereda) 出身の 60 代女性である。調査協力者に感謝したい。

音素は以下のとおり: i, e, a, o, u, ə, p[p~ɸ], t, k, b, d, g, ts, ch[tʃ], tʂ[tʂ~tʂ], s, sh[ʃ], ʂ[ʂ~ɕ], x, ʒ[ʒ], m, n, ŋ[ŋ], l, r, (ll [ʎ]), w, y. アクセントや形態音韻論については不明なところがある。また母音の弱化や脱落が頻繁に起こる。

(1)では *-atsetɕen* が動詞語幹「痛い」であり、*-betɕə* 「頭」は語幹頭母音 *a* の直後に挿入され、他の接頭辞がその外側に付いている。

抱合される形態素が動詞語幹の最初の母音の後に挿入される、という分析は奇異に見えるかもしれない。たとえば、(1)ではアスペクト接頭辞 *-x* が *-xa* と分析できるように見えるかもしれない。しかしそのような分析はできない。

- (2) *atɕ ɔ-sə-n-x-á*
 1SG C-1SG-DIR-UM-行く
 「私は行った。」

仮に(2)で *-x* ではなく *-xa* までを1つのアスペクト接頭辞と分析してしまうと、動詞語幹がなくなってしまうからである。(2) から *-x* がアスペクト接頭辞だと分析できる。すると、(1)の *a* は語幹の一部とせざるをえない。また、以下の例文に見られるように、語幹頭母音は *a* とは限らず予測できない。アスペクト接頭辞の一部であれば予測できなければならない、すなわち語幹の一部だと考えられる。

3. 抱合される名詞の形

抱合される名詞の形は以下の場合がある。

- i) 語根形
- ii) 語根形の一部、または語根形に似た音形
- iii) 語根形に似ていない音形

- (3) *sə-n-ts-o-ɕəpxa-tká*
 1SG-DIR-PROG-SHV-下腿-折る
 「私は下腿を骨折している。」

(2)では *-ɕəpxa* 「下腿」が抱合されているが、対応する自立形は *ɕəpxa-x* である。ここでは語根形が抱合されている。カムサ語では、無生名詞の多くが類別接尾辞を伴って現れる。語根 *ɕəpxa* は拘束形式であり、類別詞（接尾辞） *-x* を伴ってはじめて自立した語を成す（*-x* は主に身体部位を表わす名詞語根に付く類別詞である）。

- (4) *lanchə-shá i-n-ts-a-shbwa-tsbəbná*
 船-CL 3SG-DIR-PROG-SHV-水（辺）-浮く
 「船が水に浮いている。」

(4)では *-shbwa* 「水（辺）」が抱合されている。対応する自立形は *shbwa* であり、ここでは語根形＝自立形が抱合されている。なお、類別詞（接尾辞）が付いた自立形が抱合される例は見つかっていない。

- (5) ndəts̚-be-n̄ ɔ̄-sə-n̄-ts-a-**kwe**-xantʂetá
 石-CL-LOC2 C-1SG-DIR-PROG-SHV-手-ぶつける
 「私は手を石にぶつけた。」

(5)では **-kwe** 「手」が抱合されている。対応する自立形は *kokwa-ts̚* である。語根形 *kokwa* に対し、抱合形は **-kwe** であり、語根の一部と似た音形である。

- (6) ʂo-n̄-ts-a-**xas**-tsétʂ
 3>1-DIR-PROG-SHV-腹-痛い
 「私は腹が痛い。」(lit. 「私を腹痛する。」)

(6)では **-xas** 「腹」が抱合されている。対応する自立形は *wapsbi-ya* であり、抱合形とは似ていない。先行研究では「語根形または短縮形が抱合される」とされているが、短縮形が具体的にどのような音形なのかについては言及がない。抱合形は語根形であるか、語根の一部、あるいは語根と似た音形であることが多いが、(6)のように似ていないこともあり、どのような音形であるかは予測できない。語根形よりも長い音形の抱合形は見つかっていない。

また、抱合形が一通りに決まっているとは限らない。

- (7) chə-xán ibo-x-wa-**shekwá**-sto
 その-辺り 3>3SG-UM-SHV-足-追う
 「その辺りを（熊は女の）足（跡）を追った。」

(7)では **-shekwa** 「足」が抱合されている。自立形は *shekwa-ts̚* であり、すなわちここで抱合形は語根形である。

- (8) ʂo-n̄-ts-a-**shek**-tsétʂ
 3>1-DIR-PROG-SHV-足-痛い
 「私は足が痛い。」(lit. 「私を足痛する。」)

(8)では **-shek** 「足」が抱合されている。(7)とは抱合形が異なる。ただし(7)と(8)は意味が異なる。(7)で **-shekwa** は女の足そのものではなく足跡を表わしているのに対し、(8)では足そのものが痛い。

4. 抱合される名詞の意味と機能

名詞抱合が起こっている文と、対応する文を比べると、対応する文で当該名詞の自立形が主語である場合、目的語である場合、場所格で現れる場合、の3つがある。このことについてはすでに先行研究で言及されている。

- (9) a. *ʂo-n-ts-etsétʂ* *betʂá-ʂ*
 3>1-DIR-PROG-痛い 頭-CL
 「私は頭が痛い。」 (lit. 「頭が私を痛める。」)
- b. *ʂo-n-ts-e-betʂə-tsétʂ*
 3>1-DIR-PROG-SHV-頭-痛い
 「私は頭が痛い。」 (lit. 「私を頭痛する。」)

(9b)で抱合されている *-betʂə* 「頭」は対応する(9a)で主語として機能している。

- (10) a. *ndətʂ-bé-ñ* *ə-sə-n-ts-epegá* *kokwá-tʂ*
 石-CL-LOC2 C-1SG-DIR-PROG-ぶつける 手-CL
 「私は手を石にぶつけた。」
- b. *ndətʂ-bé-ñ* *ə-sə-n-ts-a-kwe-pegá*
 石-CL-LOC2 C-1SG-DIR-PROG-SHV-手-ぶつける
 「私は手を石にぶつけた。」

(10b)で抱合されている *-kwe* 「手」は対応する(10a)で目的語として機能している。

- (11) a. *intʂá-ng* *mo-n-ts-áxən* *bətachx-áñ*
 人-PL 3PL-DIR-PROG-歩く 道-LOC2
 「人々が道を歩いている。」
- b. *intʂá-ng* *mo-n-ts-e-bətachx-áxən*¹
 人-PL 3PL-DIR-PROG-SHV-道-歩く
 「人々が道を歩いている。」

(11b)では抱合されている *-bətachx* 「道」は対応する(11a)で場所格で現れている（なお *bətachx* は拘束形式で、場所格接尾辞が付いていないと自立した語を成せない）。

名詞が抱合された文とそうでない文とで、明らかな意味の違いは見られない。(9a)と(9b)、(10a)と(10b)、(11a)と(11b)とを比べても明確な意味の違いは感じられないという。

- (12) *chə-xán* *ibo-x-wa-shekwá-sto*
 その-辺り 3>3SG-UM-SHV-足-追う
 「その辺りを（熊は女の）足（跡）を追った。」

¹ (11b)で *e* を語幹頭母音とみることに問題があるかもしれない。

- (13) *chə-xán ibo-x-wásto shekwá-tʂ
 その・辺り 3>3SG-UM・追う 足・CL
 「その辺りを（熊は女の）足（跡）を追った。」（期待される解釈）

調査協力者によれば、(12)に対応すると考えられる(13)は非文であるという。また、*shekwá* を何らかの場所格で表わすこともできないという。(12)に対応する非抱合文は、(14)のように言わなければならないという。

- (14) rastrə ibo-x-wásto
 跡 3>3SG-UM・追う
 「（熊は女の）跡を追った。」

つまり、*shekwa* 「足」を自立形で用いて「足跡」を表わすことはできない（なお、*rastrə* 「跡」はスペイン語からの借用語である）。ということは、抱合文と非抱合文は、常に対応するわけではない、と考えられる。

抱合される名詞は身体部位または場所を表すものが多く見つかっている。(4)の *-shbwa* 「水（辺）」は、飲むための水は表せない。場所としての水を表わす。(10)の *-shekwa* も「足跡」という場所を表わしている。全体としてみると、「場所」に関係するものが多いといえるのではないだろうか。名詞抱合文において身体部位は身体から切り離されたものではなく、その一部分である。これは、身体全体に対する部分であることから、身体部位についても場所的な意味を表しているにとらえることが可能である。英語にも以下のような構文がある。

- (15) He hit me in the face.

ここで身体部位は場所の前置詞に導かれ、殴られる「私」が目的語で現れている。

しかしこの点についてはもう少し検討してみる必要があるかもしれない。次のような例があるからである（Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 42)、なお形態素分析およびグロス は発表者による。表記も発表者のものに替えてある）。

- (16) as xontʂana tsm·biə-xwa e-ts·a-sh·sañana
 そして ? インゲンマメ・CL-CL 3SG-PROG-SHV-草-食べる
 「そして（ウサギは）インゲンマメの葉を食べていた。」
 (lit. （ウサギは）インゲンマメの蔓を葉食べしていた。）

Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 82) によれば、*-sh-* は *shakwan* 「草」の抱合形であるという。(16) で *-sh-* が場所を表わしているとは解釈しにくいようにもみえる。一方で、「インゲンマメの蔓の葉の部分食べていた」という文であるとすれば、やはり場所という解釈が可能かもしれない（*-xwa* は

細長く柔軟なものを表わす類別詞で、この場合「蔓」を表わしている)。

5. まとめ

本発表ではカムサ語の名詞抱合について述べた。新たに明らかになったのは以下の点である。

先行研究では抱合される名詞が動詞のどの位置に抱合されるかについて言及がなかった。本発表では動詞語幹頭母音の直後に挿入されると解釈した。

先行研究では抱合形の音形を語根形または短縮形と記述しているが、本発表では語根形に似ていない場合があることを示した。同じ語彙素に対して異なる抱合形が見られることがあることも述べた。そして音形が完全には予測できないことを述べた。

抱合文と対応する非抱合文を比べると、抱合される名詞は非抱合文で主語・目的語または場所格名詞句として機能する。そして意味的な違いは感じられない。しかし、対応する非抱合文がない場合も見られる。

最後に、どのような名詞が抱合されるかについて述べた。身体部位または場所を表すものが多く見つっている。全体として、場所を表わすと解釈できるものが多いことを述べた。

抱合形の音形が予測できないこと、これまでに見つっている例の多くが身体部位または場所を表すものであり、他の例があまり見つっていないことから、カムサ語の名詞抱合はそれほど生産的ではないと予測される。

今後は形態音韻論の分析を進める必要がある。たとえば、*kokwa-ts*「手」(自立形)に対する抱合形は *-kwa-* と *-kwe-* の2つの音形が見られるが、基底形としてどちらか一方のみをたて、もう一つの音形は形態音韻論で説明することが可能かもしれない。

略号一覧

>: 左項が主語、右項が目的語	LOC2: 所格 2
1: 1 人称	PL: 複数
3: 3 人称	PROG: 進行相
C: 完了 (completed)	SG: 単数
CL: 類別詞	SHV: 語幹頭母音 (stem-head vowel)
DIR: 直接情報 (direct information)	UM: 無標の相 (unmarked aspect)

参考文献

- Jamioy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. *Lenguas Aborígenes de Colombia*, Memorias 6: 231-284. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.
- Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy*. Bogotá: Instituto Lingüístico de Verano.

付録

表：自立形と抱合形

意味	自立形	抱合形
頭	betʂa-ʂ	-betʂə-
目	bominʒ pshno-be	-bochə-
口	waya-ʂá	-way-(?)
鼻	tsxa-ʂ	-tsxa-
肩	tantʂa-x	-tantʂə-
肘	shmiya-ʂ shmiya-be	-shme-
腕	bwakwa-tʂ	-bwekwe-
手	kokwa-tʂ	-kwa- -kwe-
腹	wapsbi-ya	-xas-
上腿/脚	məntxa-x	-məntxə-
下腿	ʂəpxa-x	-ʂəpxa- -ʂəpxə-
ひざ	ntsamiá-ʂ	-ntsame-
足	shekwa-tʂ	-shek- -shekwa-
水（もの）	buyesh	-bwe-
水（場所）	shbwa	-shbwa-
道	bətachx-añ	-bətachx-
畑	xax-añ	-xax-

身体部位の自立形にはすべて類別詞が付いている。「道」「畑」の自立形には場所格接尾辞 *-añ* が付いている。